

今、ここで、同志と共に生きること

下 楠 昌 哉

奨励者紹介[しもくす・まさや]

同志社大学学生支援機構長

同志社大学文学部教授

[研究テーマ]アイルランド文学、幻想文学

人に知られていないようであり、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられて
いるようで、殺されてはおらず、悲しんでいるようで、常に喜び、貧しいようで、多くの人を富ませ、無一物
のようで、すべてのものを所有しています。

(コリントの信徒への手紙二 6章9—10 節)

同志社大学今出川チャペル・アワー逝去者追悼礼拝の奨励を仰せつかりました、学生支援機構長の
下楠でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。皆様ご存知のように、逝去者追悼礼拝は、2
005年のJR福知山線脱線事故と福島でのバスの事故で亡くなった方々を覚えて始めました。今では、
その年に亡くなられた方たちと共に、在学中に亡くなった学生、在職中に亡くなった教職員の皆さんに対
しても祈りを捧げる、貴重で尊い場であります。

新型コロナウイルスの完全な終息の目算がまだつかない今、まだまだ、文字どおり世界中の人々の間
の不安がぬぐえない状況ではありますが、かつて共に学び、共に働いた方々に祈りを捧げるために、我々
は本日この場に、こうして参集する機会を得ております。

昨年、一昨年と、文学部英文学科の学科主任として、一度ずつ学科学生の葬送の集いに参列させてい
ただきました。本日この場で奨励の任をいただいたことで、私はそのお二方のことをあらためて思い起こ
して、心の中に置き直し、祈りを捧げる機会を与えられております。そのことについて、深く感謝したいと思
います。同志社大学は常に3万人前後の人々が学び、働く場です。在学中、在職中に、この世においての
志半ばにして亡くなる方が全くいない年というのは、残念ながらほとんどないことでしょう。おそらくはここ
に集っている学生、教職員の皆さんの多くが、共に学び、共に働いた仲間、同志を失った経験をおもちで
あると思います。たとえ限られた時間であれ、この世で同志社という場を共有した方々を今一度思い起こ
して祈りを捧げ、我々も意を新たにします。このチャペル・アワーが、そのような時間になることを願っており
ます。

スポーツの場で得られるライフスキル

ここで、2019年度よりオムニバスにて担当させていただいている、全学向けの科目、「良心学—良心を
実践する」の話を少しすることをお許しいただきたいと思います。私は、15回の授業のうち、3回を担当さ
せていただいております。私の学問の専門分野は英文学でございますが、自身がもっております経験と
資格を基に、そのうちの1回は「良心とスポーツ」をテーマに授業を行っています。スポーツに携わる者た

ちは、そのレベルにかかわらず、スポーツを行う場において、自らの良心あるいはそれに類する自らの心のあり方を厳しく問われる場合があります。一般の競技者には無縁であるかもしれませんが、競技力を高めるために禁止薬物などを使用するドーピングは、その分かりやすい例となりましょう。興味深いのは、ドーピングを始めとする競技にかかわる不正を働いた選手たちの多くは、それを償いたいという強い贖罪意識をもつそうです。日本でもカヌー競技において、ライバルの選手の飲料にドーピング違反となる禁止薬物を混入するという大変残念な事件がありましたが、その事件の全容が解明されたのは、薬物を混入した選手自身が、自らの犯した罪を告白したからでありました。

近年、スポーツ心理学の分野では、スポーツの場で得たライフスキルを、日常生活においても活かそうとする試みがなされているそうです。フェアプレイ精神に見られる試合中の高い倫理性、日々研鑽を積み節制を重ねる生活態度、仲間と助け合う協調性、相手を敬う徳性、極限状態での一瞬の判断力・決断力、そのような心持を、一般の生活にも敷衍していけないか、という考え方です。同志社大学の体育会各部のOB・OG組織である同志社スポーツユニオンにはフェアプレー、フレンドシップ、ファイティングスピリットという同志社スポーツの3F精神があり、スポーツの場以外でもその三つの精神性を発揮することが勧奨されています。フェアプレー、常に公正であれ。フレンドシップ、スポーツの場を離れても、敵とも味方とも友であれ。ファイティングスピリット、いかなる時も、恐れず、怯まず、勇気をもって事にあたるべし。問題は、学生たちにどれほどこの三つの標語と心持が浸透しているかですが、ともあれ、スポーツで培った特性を日常生活にも敷衍して実践する、学内で見られる身近な例になろうかと思います。

スポーツに関してなされた思索と日常生活全般についてなされた思考の関係性は、ピラミッドの形を想起すると分かりやすいと思います。自分が専門的、あるいは熱意を込めてかかわっている競技に対してなされた思考が最上部、スポーツ全般になされる思惟がピラミッドの中段、生活全般に対する思索がピラミッドの基盤となってスポーツに対してなされる思索を支えます。このような末広がりの形で思索を拡張し、深めてゆくことができれば、スポーツを行うことによって得られたライフスキルや精神性は、その人の人生そのものを豊かなものにしてくれることでしょう。しかしながら、「部活ムラ社会」なる言葉がある日本のスポーツ文化においては、なかなかそのモデルにうまくおさまっていかないところがあるようで、思索の度合いが、個別のスポーツに対する思索が最も肥大している逆ピラミッド形になっていたり、個別スポーツの思索部分が遊離して別のところにあったりする場合も往々にしてあるようです。新島襄先生の同時代人、柔道の始祖、嘉納治五郎先生は、柔道の二大原理として「精力善用」「自他共栄」を掲げ、技を極めるだけでなく、柔道の鍛錬で培った心技体をもって社会に補益すべきと唱えましたが、その域に達するのは、なかなか長い道のりのようです。

燃え尽きることの難しさ

以上のような内容の講義を、「良心学」の「良心とスポーツ」の回において講じているわけですが、普段、教室という空間から隔絶された場で行っているスポーツを、生活全般の中でとらえ直し、学友たちと共に考えることが刺激的であったのかもしれませんが。昨年の講義では、多くの学生たちから積極的な反応をもらいました。そうした学生たちの反応を思い起こすに、学生たちの多くが気になったと思いきとピックの一つに、「スポーツをや리きることの難しさ」があります。スポーツに情熱を傾けた人々の多くは、

そのスポーツを「燃え尽きる」までやることを望みます。スポーツに携わる者の多くがもつこの願望を、鮮やかに視覚化してみせたのが、ちばてつや作画、梶原一騎原作の漫画作品『あしたのジョー』（講談社）です。ジョーは以前に同志社のチャペル・アワーにも登場したことがあったようですが、本日は簡単に紹介するだけに留めます。1960年代後半から70年代にかけて雑誌連載されたこの漫画はアニメ化もされ、原作の終了時期と、最終回を含むアニメシリーズの時期がずれたことで、最終回における世界タイトル戦終了後のジョーの台詞、「燃えたよ……。真っ白に……。燃えつきた……。真っ白な灰に……」と、真っ白に燃え尽きたジョーの姿の記憶は、多くの世代に共有されることとなりました。今年閉園した東京の遊園地としませんが、閉園挨拶のための新聞の大広告でジョーの燃え尽きた姿を使って見せたのは、私としては記憶に新しいところです。もっとも、かつては「日本の常識」に近いものでしたが、すでに番組の放映終了から約40年が経過し、学生たちにとっては学ぶべき古典に近い作品になっているようです。ピンとこない方は、どうぞ原著にあたってみてください。

「良心学」の講義においてはジョーのほかにも、先だっでの入学記念会の動画で、植木朝子学長先生がご紹介された『深夜特急』（新潮社）を執筆した沢木耕太郎氏の連作ノンフィクション『敗れざる者たち』（文芸春秋 1979）、それから、サハラ砂漠横断を試みて20歳にして渴死した上温湯隆氏の残したノートを編纂した『サハラに死す：上温湯隆の一生』（時事通信社 1975）を、燃え尽きる瞬間を求めた実在の人々の姿を描いた書籍として紹介しました。どちらも文庫本になっておりますので、機会があれば、ぜひ読んでいただきたいと思います。

さて、このような、スポーツをやり切り、真っ白な灰になって燃え尽きたいという願望は、おそらくはスポーツに情熱を傾けた人々すべてがもつ、見果てぬ夢です。自らが心血を注いだスポーツとのかかわり合いの区切りは、ほとんどの場合、真っ白に燃え尽きる前に、心の充足とは別の理由でやって来ます。部活の引退、競技やトレーニングによるケガ、加齢による衰え、家族構成の変化、スポーツ選手にとっては契約の打ち切り、など。スポーツと競技者の一時的な幸せな関係性は突然に、多くは理不尽な理由で終焉を迎えます。

それでも、一般の競技者の場合は、そのスポーツとの向き合い方を少し変えれば、スポーツとの良好な関係を再び取り戻せるかもしれません。あるいは、本業をおろそかにしないならば、「燃え尽きる瞬間」を家族の理解がある限りは追い求めることができるかもしれません。しかしながら、それを生業とするスポーツ選手の場合は、そうはいきません。毎年、この時期になると戦力外通告を受けたプロ野球選手の名前を頻繁にメディアで目にするようになります。燃え尽きる瞬間を追い求めて、あるいは生活の糧を維持するために、トライアウトに臨む者、あるいは次の人生に向かって歩み出す決断をする者の姿を報じるテレビ番組も、毎年つくられているようです。

死を忘れぬこと

こうしたプロのスポーツ選手たちは多くの場合、現役である時点から、自らの「競技者としての死」を意識することが求められます。競技者として収入を得るためには、肉体と技術に関して一定のレベルを保たなくてはなりませんが、それができなくなった時、その競技者は自らの「スポーツ選手としての死」を受け入れて、新たな人生を歩み出さなくてはならないからです。もしキャリアの切り替えがうまくいかなかった

ならば、生活の維持さえ困難になってしまいます。こうした事態に選手たちが陥らないように、サッカーのJリーグでは、選手たちのキャリア・トランジションがうまくいくように、現役の選手たちにセカンド・キャリアに関する講習などを行っているそうです。選手によってアドバイスの形は異なるでしょうが、「一日一日燃え尽きる」ように、その日のトレーニングや準備にやり残したことがないように、毎日をやり切るように助言することもあると、仄聞したことがあります。しかしながら、その分野の専門家である高橋潔氏と重野弘三郎氏の共著論文などを拝読すると、選手たちの中には、そうした話をもちだされること自体に拒否反応を起こす選手も少なからずいるそうです。現役の選手に、使い物にならなくなることが前提の話をするわけですから、無理からぬ反応なのかもしれません。しかしながら、スポーツ選手としての死は文字どおり、あっという間にやってきます。Jリーグにおいて、新人入団選手の多くは2、3年で最初に入団したチームを去らざるを得ず、引退の平均年齢は25、6歳とされています。

スポーツの現場においては日常生活とは異なった極端な状況が生まれ、競技者たちはそれに対応するために特異な精神状態に置かれることがある、近年スポーツに携わる人々によって、そうした経験を経て得たライフスキルを一般の生活にも活かすことはできないかと考察されている、という内容のことを先ほど申し上げました。この世に生を受けた者は誰であれ、死という運命から逃れることはできません。

“Memento mori”, “Carpe diem”といった有名な言葉に見られるように、古今東西の賢者たちは繰り返し、死は避けられぬものであること、だからこそ一日一日を真剣に懸命に生きるべきであることを説いてきました。とはいえ、いやなことには目をつぶってしまうのが、人の性であります。取り立てて特別なイベントのないその日一日を最高、最善、最良のものとするために、それこそ毎日全力を尽くすことは難しいでしょう。けれども、自らの短い選手寿命を自覚し、一日一日を無駄なく考え抜いた経験を持つスポーツ選手ならば、“Carpe diem”, “Memento mori”といった言葉を、自らの血肉に刻み込む形で理解し得るはずです。自らの選手人生を納得いく形でまっとうし、第二の人生において自らに与えられた時間が有限であることを体感として理解し、日々生きている元選手たちの言動は、周囲の人々にもきっと何かを伝えることでしょうし、また、そうした人々の言葉は、まさしく傾聴に値するものでしょう。

同志社の歴史を同志と共に

では、こうした日々の心持を獲得できるのは、高度なレベルでスポーツに携わった競技者だけでしょうか。そんなことは、ありません。身近な人々が生を失う体験をし、そのことによりこの世で我々に与えられた時間が有限であることを理解し、亡くなった方々のことを深い祈りと共に思い出し、自らが今ここで何をなすべきかを思考し続けられる人々。すなわち、今日この場に集っている皆さんの多くが、死が我々の隣人であることを常に忘れず、一日一日を大事に生きていच्छる人たちであることを、私は確信しています。限られた時間であったにせよ、共に学び、共に働いた仲間のことを忘れず、折に触れ、あるいは毎日、彼ら彼女らに対し祈りを捧げ、この世での志半ばであっても死は受け入れざるを得ないものであることを深く理解してこの場に集っていच्छるのが、皆さんだからです。そして、そうした日々の生活の大切さを我々に教えてくれたのは、言うまでもなく、今日この場で我々が祈りを捧げる方々であります。

2025年に、同志社は創立150周年を迎えます。皆様ご存知のように、校祖新島襄先生は勝海舟に、「大学の完成には200年かかる」と言ったとされます。すなわち我々はその道筋の途上にいるのであり、

この場にいらっしゃる方全員が創立200年目の同志社を見るということはないでしょう。おそらく、私も無理だろうと思います。そもそも、新島先生が神奈川県大磯の百足屋で46歳と11か月の人生を終えられた時、同志社のためにやるはずであったこと、やりたかったことはそれこそ無限にあったはずであります。同様に、同志社に在学中、在籍中に亡くなった方々にも、間違いなく同志社でやりたかったことが数限りなくあったはずです。その点に関しては、さぞ皆さん、無念であったろうと思います。けれども、同志社がその完成に向けて進んでゆく歩みの中で、新島先生と同じくその方々が同志社にいらしたということ、その方々が同志社で行ったことは、間違いなく同志社の歴史を形作っているものであり、そこが欠けて、現在の同志社も、未来の同志社も存在することはありえません。今日この場にいない方々、いらっしゃる方々、そのすべてが同志社の歴史、そして同志社そのものを形作っているのだということに、今一度皆さんといっしょに思いを馳せたいと思います。

最後に、大変僭越ではございますが、英文学科主任としてこの世からお見送りした、大学を卒業できなかった二人の学生たちのために、そして同志社の卒業式に出席することがかなわなかった方々のために、新島先生が同志社の最初の卒業式におっしゃったという言葉を、この場で繰り返すことをお許しください。

“Go, go, go in peace. Be strong. Mysterious hand guide you.”

Mysterious handの導きは、この世でのほしいがままの充足を約束しないかもしれません。しかしながら、身近な人が亡くなる経験をし、死というものが確実に自分たちにもやって来ることを体感として伝えられている我々は、だからこそ、一日一日を大事に生きていかなくてはならないのでありましょう。

それではこれにて、私の奨励を終わらせていただきます。ありがとうございました。

2020年11月4日 今出川水曜チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録